



フィリピンスタディツアー 2017GW レポート集



実施時期：CEBU 2017年5月2日（火）～7日（日）

主催：  **特定非営利活動法人 八〇八〇**

東京都江東区深川 1-1-2 403 TEL/FAX 03-5875-9923

◆ 2017GW スタディツアーを終えて

今回は、当事業始まって以来初めて催行人数を下回る2名での実施となりました。少人数だったからこそ、現地側スタッフを含めて十分な体制で受け入れを行うことができ、お二方のニーズに沿うような進行もできたのではないかと考えております。積極的なプログラム参加をしてくださった2名のご参加者には心より感謝しております。私たち運営側は今回の学びから、さらにより実施体制を構築していくよう努めます。

お二方が、地域の子どもに楽しい思い出を残そうとたくさん遊んでくださったり、貧困地域の生活や文化を理解しようと子どもや大人にたくさんご質問くださったりしたことは、広く地域の人々の印象に残り、新しい価値の創造につながっていきます。私たちハロハロの活動は皆様と、そして地域の人々とで未来を築いていく活動だと思っています。こうして地道にスタディツアーを続けていくことが、人々の大きな成長と未来につながっています。これからも一緒にこの活動を育んでいただければ幸いです。

ハロハロ理事長 成瀬悠

◆ 収支ご報告

(収入) 141,600 円

参加費：129,600 円 サポーター会費：12,000 円

(支出) 187,650 円

宿泊費 19,900 円 人件費 37,750 円 飲食費 27,000 円 雑貨 500 円 旅費交通費 73,000 円
現地団体寄付金 7,500 円 事務経費 10,000 円 ハロハロ会費 12,000 円

※ 今回事業赤字額は 2017 年度に行う同スタディツアー事業収入で補填予定。

※ 皆様からの参加費の一部は、現地協働団体 (Tulay sa Kinabuhi) とハロハロの活動支える寄付金として活用させていただいております。なおこの現地視察会実施にあたり、事業実施地域の中に臨時雇用と収入の機会が生まれましたことをお礼申し上げます。

スタディツアーレポート

岡部はつみ

私が今回参加したきっかけは、知人が前回のツアーに参加していて、その体験発表会で話を聞いたからというだけでした。英語も喋れず教育などのスキルも無いのに参加してしまいました。

ホームステイ先の村は貧しい区域で、そこらじゅうにゴミが落ちていて異臭がし、地面はぬかるみ大きな水溜まりがあり、まっすぐ歩ける平らな場所がありませんでした。おびただしい数のハエが飛んでいて食べ物にたかり、夜になるとそのハエ達が有刺鉄線にきれいに1列に並んでいました。痩せ細った野良犬や猫、様々な動物が村をうろうろしていました。トイレは紙が無く、便器の真横に水を入れた樽があり、そこから手桶で流したり、水浴びをしました。

現地に着いて、自分の役割を考えました。自分の信条のひとつに、豊かな社会を作るには、まず子供を大切にするというものがあります。子供時代の教育や楽しい思い出や経験は、将来を作る力になるからです。

ですが、教育などの技術は無いので、全体力を使って子供達とふざけることにしました。追いかけっこや変顔をしたり、let it goを日本語で歌ったり、ppapやカンナムスタイルを踊りました。「ありのままの」のフレーズを子供達が覚えてくれたので、もしいつかこの子供達が日本に来られた時に、ふと思い出して話のきっかけになってくれたらいいなと思いました。

子供達は年よりも小さく見えて、咳や鼻水をたらしていたり、抱っこするととても軽かったりしましたが、みんなシャイだけど常に明るく人懐っこかったです。

でも、とても積極的なのに、大人達に「stop!」と言われると妙に諦めが早いのが、少し切なかったです。日本の子のように泣いて駄々をこねたりしないんだなと思いました。本当に小さな子供が、井戸のポンプで水を汲んで運んでいたりしました

日本からねるねるねるねやグミを作るお菓子のキットを持って行き、子供達と作りました。終わった後に出た空き袋を小さくひとつにまとめて見せて、ゴミはこうやって捨てるんだよと言いました。理解できたかはわかりませんが、次の日になってもその空き袋を持っていてくれたので、何か伝わっていたらいいなと思います。

村の大人達もみんな明るくお喋り好きで、いつも誰かが外に座っていたり、窓から顔を出

してぼんやりしていたり、常に音楽が流れて賑やかで、孤独を感じませんでした。
ホームステイ先にはまだよちよち歩きの孫がいて、ホストマザーがその子をとても愛して
いる様子に、自分まで幸福感に満たされました。外から見ただけではわからない苦労はた
くさんあるのですが、現代の日本ではあまり見られない愛と活気を感じました。
もし語学力や技術が無くて行くのを悩んでいる方がいたら、ぜひ行って子供達と遊んでほ
しいです。楽しい思い出をたくさん作ってください。



スタディツアーレポート

村田早紀

私がかねてより途上国に関心があり、観光よりも、より住民の生活や途上国の開発課題が見られる本スタディツアーに参加させて頂きました。

今回のスタディツアーで一番印象に残ったことは、HALOHALO のフィリピンの現地協同団体である Tulay Sa Kinabuhí の代表夫妻、グレーマー氏とガーリー氏の存在でした。スタディツアーも成瀬さんに加えお二人が同行して下さり、サイトで事業内容について説明して下さいました。地域の漁村でのマイクロファイナンス活動、廃材を使った雑貨作り、フェアトレードのアクセサリー作りなど、これまで様々な事業を立ち上げてきており、お二人の「コミュニティの中に人々の繋がりを作っていく、コミュニティの発展に繋がりたい」という強い気持ちを感じました。お二人のイニシアチブに地元の方々が意欲的についていって事業が進んでおり、途上国の発展には、外からの力ではなく内発的なイニシアチブが重要であるということを感じることができました。

またツアーの目玉の一つであるホームステイも、言葉に表せないほど貴重な経験でした。こういった NGO の繋がりがなければ絶対に入る機会がないようなローカルなコミュニティに4日間入ることができて、彼らの生活の一部を覗けたことが、大変勉強になりました。お家は様々なものを切り貼りしてできたバラック小屋で、狭い部屋で子供から妊婦から5人が段ボールをしいて寝ていました。シャワーを浴びたいと言ったら、ホストファミリーの方が近くの井戸からバケツ一杯に水を汲んで軽々持ってきて下さったのですが、自分もちょっとバケツを持つてみるととても重くてびっくりしました。

ホームステイしたコミュニティには、若くして子供ができ、学校も卒業せず母親になった女性が多くいました。彼女たちはそういった環境上、生活すること以外に「こういうことをしてみたい」といったような夢や目標は持っていないようでした。インタビューで「日本の事を知っているか、行ってみたいか」というような質問が出たとき、「私たちにとって日本なんてフェアリーテールで、夢のまた夢という感じ」と女性が答えていたのに対して、14歳のホストシスターは、「勉強を頑張って、両親に誇りに思ってもらいたい。将来はキャビンアテンダントになりたい！そうしたら色々な国に行けるから！」と楽しそうに話していて、その違いが印象的でした。ホストシスターの夢が叶ってほしいと心から思いました。

ホームステイではとてもよくしてもらって、毎日おいしいご飯を出してもらったのですが、普段はお金に関して家庭内で喧嘩も多いとの話や、お肉は高いから普段は沢山買えない等の話を聞きました。また若くして子供が2人いる女性が、100ペソのフェアトレード商品の腕輪をもらって「ずっと買えなかったから嬉しい！これすごくかわいい！」ととても喜んでのを見たときは、100ペソの贅沢などとてもできないという貧困の現実を垣間見ました。

コミュニティの中心にある共同の建物では、バイブルスクールという夏季教室が開催さ

れたり、常にコミュニティの皆が集まる場所となっており、笑いの絶えない、とても暖かい場所だと感じました。

日本人の多くが、セブと聞くとリゾートを想像すると思いますが、そうではないセブの生活の一部を見ることができて、短い時間ですが本当に有意義な時間を過ごさせて頂きました。今回のスタディツアーでの経験は、今後途上国の人々が望んでいることは何なのかを考えていくのに大変役に立つと感じています。途上国の人々の夢に何等かの形で貢献できたらというのが私のやりたいことの一つです。

最後になり恐縮ですが、ハロハロの成瀬さんには大変お世話になり、本当に多くを学ばせて頂きました。この場を借りて御礼申し上げます。



写真：ホストファミリー、ホストシスターと。ホストファミリーの皆さん、暖かく迎えてくれて本当にありがとうございました。ホストシスター、家系図を書いてくれて、仲良くしてくれて本当にありがとう！！